

前立腺癌小線源療法を受けた患者の思い

外来診療部

○ 池ノ内 千乃 松岡 敬子 坂本 佳代 山崎 利恵

キーワード：前立腺癌小線源療法、患者の思い、意思決定

I. はじめに

前立腺癌小線源療法は限局性の前立腺癌に対する放射線治療であるが、医療法、放射線障害防止法などの法的な問題が解決し、2003年9月よりようやく日本で施行できるようになった治療法である。この治療法は、放射線障害が起りにくい・安定した照射野が得られる・性機能が維持されやすい・尿失禁が起りにくい・身体への負担が少ない・入院期間が短いなどの特徴から今後、患者の増加が予想される。しかし、看護に関する文献が少なく、この治療法を受ける患者を取り巻く状況がわかりにくい。そこで私たちは、この治療法を受ける患者への、外来での看護介入を行う指標を得たいと考え研究に取り組むことにした。

II. 研究方法

1. 調査期間

2005年8月17日～11月9日

2. 対象者

A病院泌尿器科で前立腺癌小線源療法を受けた患者15名

3. データ収集・分析方法

半構成質問紙を用いたインタビューを行い、内容を逐語録にしてKJ法で分析

III. 倫理的配慮

対象者に研究の主旨とインタビューの方法・個人の情報に関する説明文を渡し、同意書を得た。

IV. 結果

1. 対象者の概要

平均年齢は68.73歳で、全員既婚で子供がいる。9名が職業を持っており、6名が無職であった。施術からの期間は2ヶ月～12ヶ月。

2. 抽出された項目

逐語録から治療を選択した患者の思いや施術後の思いに関する言葉を中心に抽出し、それらを引き起こしたと考えられる事象・あるいは原因ごとにカテゴリーに分類した。その結果、1) 治療に関する情報、2) 前立腺癌小線源療法前後の不安、3) 前立腺癌小線源療法に伴う身体的苦痛、4) 入院生活、5) 前立腺癌小線源療法後のQOL、6) 治療に対する満足、という6つの大カテゴリーに分類された。

V. 考察

1. 対象者の平均年齢や有職率から、早期の社会復帰を望む集団であることがうかがえる。

2. 治療に関する情報

全ての対象者が、医師からの説明や小冊子・インターネットから情報を収集しており、事前に十分な情報を得ていたと感じていた。情報不足と感じた点は、小冊子やインターネットからの情報では得られなかった具体的な手技についてであり、情報提供の内容などを考えたい。

3. 前立腺癌小線源療法前後の不安

対象者の多くは、施術前の治療に関する不安がなかった。これは十分な情報が得られていた裏づけと考えられる。施術後も、不安はほとんどあらわれなかった。これは、晩期副作用が出現していないため、と推察する。

4. 前立腺癌小線源療法に伴う身体的苦痛

治療中には、殆ど治療に伴う苦痛は感じていなかった。しかし、環境への不満があり環境整備に留意していた。治療後の苦痛では、ほとんどが初期におこりうる急性副作用であり、継続した観察が必要といえる。

5. 入院生活

放射線管理区域での入院で、閉鎖された感じ・牢獄の部屋・霊安室みたいな感じ、と悪印象が挙げられていた。環境の悪印象は不安の増大につながるため、事前の説明や改善策の余地がないか、検討してみる必要があるだろう。入院生活全般では、特に支障となる点は見出されなかった。これは入院日数が短く、身体の安静度による拘束もほとんど無く過せるためと考える。

6. 前立腺癌小線源療法後のQOL

今回、性機能に対する不満はなかったが、デリケートな質問内容であり、インタビュー形式で十分な回答が得られたかどうかは疑問が残る。放射線による日常生活の影響では、心配していない・理解していた、とあったが、これは、治療法を選択した時点で予想されていたことから、日常生活への影響が少ないと感じたのではないかと推察する。

7. 治療に対する満足

治療後の経過が良好で、早期の社会復帰が可能であったことなどから、自分が思ったとおりの経過をたどったと想像される。対象者に満足感をもたらせたのは、治療の選択において十分な情報を得て意思決定した結果と思われる。患者が意思決定に至るには、自分の病気の状態と提示された複数の治療法を理解することから始まる。その理解を前提として、自分の治療後の生活の将来像、QOLなどがイメージされなければならない。

VI. 結論

前立腺癌小線源療法を受けた患者は、十分な情報を得た上で期待を持って治療に臨んでいた。入院生活では、放射線管理区域に対する悪印象を抱くことが多く、考慮すべき点である。治療に伴う身体的苦痛は少なく、日常生活のQOLはほとんど変化していないと感じており、この治療法を選択した意思決定に満足感を抱いている。看護師は、治療法が決定されるまでの過程で患者が、情報をどの程度整理できているかを明らかにし、理解を助けるように働きかける必要がある。

〔平成18年10月12・13日 第37回日本看護学会 成人看護I（京都）にて発表〕